

付録 5: 第 2 回検討会

－協働価値の可視化と EPO の中間支援機能

【付録 5: 第 2 回検討会－協働価値の可視化と EPO の中間支援機能】
第 2 回検討会における中間支援機能(EPO)評価ワークショップに基づき作成

【表付録 5-1: 協働価値の可視化(GAIN と LOSE)(全体)】※()内は頻度

G A I N	個人能力の向上 (知識、スキル、行動)	● 多角的な視点が持てる(2)。 ● 全く新しいアイデアや発想が生まれる(2)。 ● 俯瞰した目線をもてる。 ● 内部の人が言えないことが言える。 ● 共通認識に基づく仲間づくり。 ● 達成感の共有。 ● 我がこと化。 ● ステークホルダーの価値観が変化する。 ● 関わる人の理解度が上がる。 ● 使えるリソースが大きく広がる。(情報・人脈) ● 知り合った他者の技を使えるようになる。 ● 自分にはないスキルが得られる。(利用＋技術移転)
	組織能力の向上 (プレゼン、資金獲得、 人事管理、計画立案、 組織間コミュニケーション、 ネットワーク)	● 多様な意見がうまれる。 ● 得意分野を持ち寄れる。 ● 組織の強みを自覚する。 ● 本領が分かる。 ● 新しい関係者やネットワークが広がる。 ● 新しい仲間が増える(2)。 ● 新しいことが出来そうな気がする。 ● 団体の活動が広がる。 ● 事業・活動の持続性につながる。 ● 多様性が生まれる。 ● 多様なセクターとつながれる。 ● 事業の数が増える。 ● いろんなアイデアが出る。 ● 出来ることが増える。 ● 三人寄れば文殊の知恵。 ● 1人当たりの作業量は減る。(ハズ) ● 視点が増えると、ブラッシュアップの精度が上がる。 ● 事業の認知度が上がる。 ● 情報流通量が格段に上がる。 ● ネットワークとして行う効果を発揮できる。 ● コスト(費用)が分散される。 ● 資源(人・モノ・金)の集積、応負担。 ● 協働することで新たな関わりをつくれる！ ● 違う視点が入り、プランが強固なものになると穴がなくなる。 ● ひとりでやるよりでっかいゴールにたどりつく。
	市民能力の向上 (合意形成、地域づくり)	● 公共性の向上(2)。 ● 自治体の有する政策課題とのリンクが強くなる。 ● 趣味だったものが社会貢献につながる。 ● 長く続く取組になる。 ● 共通目標が見いだせる。 ● 地域の課題の見える化につながる。 ● 政策側のニーズを顕在化させ、市民の実行により政策を補完できる。 ● 政策と絡めることで市民だけでは解決できないことに取組むことができる。 ● 対立関係の緩和。 ● 社会における各ステークホルダーの役割に対する理解がすすむ。
	社会的学習の深化	● 楽しくなる。楽しみがもらえる(2)。 ● 変えられる、越えられる、驚きがある、自分が変化する実感があることで、楽しくなり、寂しくなくなり、知恵と力と愛がふくらむ。 ● 参加感が高まる。 ● 新鮮味が生まれる。 ● モチベーションアップ。 ● 苦労も分かち合うことで、次へのモチベーションにつながる。 ● “やらなければ”がモチベーションになる。(うまくいくと楽しい) ● 他の視点から見えることの喜び。 ● わたし、あなた、みんな、の関係ができる。

		● 声を拾う努力をすることになる。
L O S E	協働取組における責任 所在の不明確化	● 協働の名の下に、責任感が分散される。 ● 協働はできたが、事業の成果は？のこともある。 ● 協働することで質や目標が下がることもある。 ● 目標なき協働は成果を生まない。 ● とんがったアイデアが実現しにくい。 ● 結果的に最大公約数的な解に落ち着いてしまう。 ● 一度協働が広がっても、また閉じた関係に繰り返し陥ってしまうリスクがある。 ● 責任の所在が見えにくくなる。 ● フォーカスが甘くなる。 ● 協働ニーズの非対称性。(余計なお世話)
	合意形成の難しさ	● 合意決定に時間がかかる(2)。 ● 民主的な決定という名の強要。 ● 妥協。 ● 多様な主体間での合意形成は難しい。 ● 対立が生まれる。 ● 意思疎通に限界がある。
	調整コストの発生	● 連絡・日程調整が大変(4)。 ● イヤな意見、苦手な人とのやりとり。面倒(2)。 ● 集まるのが大変。 ● 時間は有限。 ● 動きが遅くなる。 ● 同じことを何度も説明する。 ● 信頼構築に時間がかかる。 ● 倍々ゲームで手間となる。 ● 未知との遭遇はストレス。 ● ステークホルダーの嫌な部分がもっと見える。 ● よく怒られる。(理解してもらおう努力をしないといけない) ● エネルギーがかかる。 ● やり辛さがでる。
	介入の難しさ (本事業における伴走支 援にもとづく)	● 協働する相手先団体へのリスペクトを忘れるとこじれる。 ● 「オブザーバー」には限界がある。見極めが難しい。 ● 介入がイチかバチか。間違うと、全てを壊す可能性もある。 ● 失敗した時のダメージはでかい。 ● 中立的な立場の確保が難しい。 ● 場づくりが難しい・時間がかかる。 ● 相手の立場を考えなければならない。 ● どろどろの中に入っていかなければならない。火中の栗拾い。 ● 人間の本質にぶつかる。 ● 疲れる、人が嫌いになる。 ● 罵声をあびる。 ● 自分の器の狭さにぶつかる。

【表付録 5-2:「協働ガバナンス」における中間支援機能(対個別案件)】※[]内は採択された協働取組事例

要素	詳細	支援内容
開始時の状況	パワー・資源・知識の非対称性	● 農業関係者や漁業関係者など地元産業におけるステークホルダー内のパワーの片寄りが大きすぎる(農業・畜産が強い)状況下での調整の難しさ。[4] ● 特定の人の声が大きい状況下での調整の難しさ。[4]
	参加の誘発と制約	● 団体内において事業理解を促進させる。[2] ● 過去 10 年間の取組を振り返り、実績の見える化を提案する。[2] ● 3 回の KODOMO ラムサール事業における目標を整理する。[2] ● KODOMO ラムサールの 3 地域での協働取組による相互・交流。[2] ● 地場産品(農・漁)の流通に向けて、レシピづくりを通して、今まで関わってなかった女性団体の巻きこみを図った。結果、女性たちの関心/参加度は増した。[4] ● 他のラムサール湿地との交流、学校(小中 6 校)の参加(教育委員会への働きかけ)→そのうち 1 校が実施、他校にも働きかけを続けている。[4] ● 役場から既存の大沼環境保全計画活用の提案を得た(政策との関わり)。[4] ● 強み・弱みを明らかにした。[7] ● 事業が“まわらない”ことを指摘し、その要因を明確に示唆。[7] ● 協働のモチベーションを注入。[9] ● アンケート作成を自治体担当者と共同実施するようにアドバイス。[11]
	協力、あるいは軋轢の歴史(開始時の信頼の程度)	● 協働を生み出す共通項を見出す作業に関わる。[1] ● 「公的な立場」が入ることで軋轢を減らした。[1] ● 2012 年のラムサール登録をきっかけに保全と活用のための“協議会”はできたが、その後機能しなくなった。[4] ● 漂着ゴミ問題と関係自治体の課題とのギャップ、関連性の明示。[8]
運営制度設計	広範なステークホルダーの包摂	● 第三者の介入を促した。[1] ● 既存の会議を利用した新たなステークホルダーの巻き込み機会のセッティングについてアドバイスした。[2] ● ラムサール登録 46 湿地の巻き込み→属性に基づくブロック化[2] ● 利害関係者の洗い直しと新たなステークホルダーの巻き込みを提案した。[4] ● 外部の人を紹介し、現場を見せてアドバイスを採択団体にもらった。[4] ● 新たなステークホルダーの参加を提案。[7] ● 必要としている情報、ノウハウ、人材の提供。[7] ● 南丹地域(文化・歴史・自然の共通性)や下流域(発生抑制への寄与に留意する)など巻きこむ対象を増やしている。[8] ● 打ち出し方・場のづくり方、上流と下流の対比。[8] ● メディアの人をもてなす(団体が行った)。[11] ● 情報提供、アイデアの提示、多様な視点(どんぐりマーク、排水)。[11] ● 人の紹介をした(専門家)。[11] ● 文書発出(地方環境事務所から)→フォーラムへの出席。[13] ● 企業との連携。[13]
	討議の場の唯一性	● 会議設計のアドバイスをする。[2] ● 既存の会議を利用した新たなステークホルダーの巻き込み機会のセッティングについてアドバイスした。[2] ● 協議の場の提供。[11] ● フォーラムにおけるマターを明確にする。[13] ● フォーラムの役割の明確化→情報発信(ポータルサイト)、ソフト…。[13]
	明確な基本原則	● 高い視点を提供する(鳥の目の提供)。[1] ● 協働体制の作り方についてのインプット。[2] ● 共通目標(保全活用計画の必要性・計画策定)の協議の場づくり。[4]
	プロセスの透明性	● KODOMO ラムサール・プログラム作りの過程にステークホルダーを巻き込む。[2]
協働プロセス	[膝詰めの対話]	● インフォーマルな場を活用して団体コアメンバーや地域協働ステークホルダーとコミュニケーションをとる。[2] ● 衝突を恐れないことで本音を引き出す。[2] ● 販路拡大のための協議の場づくり。[7]
	[信頼の構築]	● ステークホルダーへのヒアリングをする。[7] ● 亀岡市の教育制度(環境教育)への接近の促し。[8] ● 自治体との関係づくり(ヒアリングの場とその前後のコミュニケーション)。[8] ● 場に同席する。[8] ● 地元イベントへの参加(フォーラム)。[13] ● コミュニケーションの促進。[13]

		● イベント開催の連携。[13] ● なまあたかく見守る。[13]
	プロセスへのコミットメント	● 主体的に場に加わり、元々の活動に意味づけをしていく。[1] ● 原則を崩さないために、伴走者が一部事務局の役割を担う。[1] ● 関係性づくりから仕組みづくりに後押ししていく。[1] ● まだ巻き込めていない関係市町村にアンケートを取るよう促した。[2] ● KODOMO ラムサールのノウハウを地方に移転する際に、見本となるマニュアルやテキストを提供。[2] ● この事業により増えた事務作業のための事務局に人材を紹介した。[2] ● 助成金頼み→自治体予算へ。[2] ● 「政策協働」に向けたステップを、EPO と採択団体で働きかけて進めた。[4] ● 大沼環境保全計画を改定する主体となる「大沼環境対策保全協議会」にはこれまで市民が参加していなかったが、ラムサール協議会が、市民の立場から「大沼環境対策保全協議会」に入ること、市民の意見を大沼環境保全計画に反映する方向で動いている。[4] ● 利害関係に対する外部評価。[7] ● 政策提案への可能性、協議支援。[7] ● 海ごみ学習プログラムの内容、導入に関する助言。[8] ● ごみマップの位置/役割についての意識変化。[8] ● 時間のかかるプロセスをとばさないことに気付かせる。[9] ● 客観的な目線を提供する。[9] ● 助成金情報の提供。[11]
	[共通の理解]	● 客観的な視座を提供する。[1] ● ステークホルダーが集まる機会に事業についてのインプットをする。[2] ● 地域協働のステークホルダーに対してインフォーマルなインプットを行った。[2] ● 採択団体のウオッチだけではなく、地域のニーズに目を向けさせた。[2] ● 宮島沼のワイズユースの「政策協働」を EPO がつないで、利害関係者へのヒアリングによるアドバイスをもらった(資源連結)。[4] ● 事業自体の特徴に他者からの評価をうける。[7] ● 他地域、他事例の評価。[7] ● 事業の特徴を明らかにする。[7] ● 広報の支援(採択団体依頼)。[7] ● このプロセスをとばさないことに気付かせる。[9] ● 観察、モニタリング、滞りが起きた時の取り除き、後押し。[9] ● ノウハウ補完。[9] ● 協議会のビジョンの交通整理。[9] ● 共通理解を得られるような「言葉」・「図解」、言いたいことの見える化。[9] ● 言語化、可視化、しつらえへの助言。[9] ● 協働の深化=コミットメントを促す。[11] ● 類似事例との差別化と連携。[13] ● 協議会で質の担保→クラブツーリズム、フットパスとの連携。[13] ● 通信紙、営業ツールとして。[13] ● ターゲットレイヤーの明確化。[13]
	[中間の成果]	● 協働における成果の見える化を行った。[2]
	[社会的学習]	● 協働における成果の見える化を行った。[2]
	成果	● 団体と地域のこれまで 10 年間の関係性に変化を促した。[2]

[1](公財)公害地域再生センター(あおぞら財団)／[2]ラムサールセンター／[3](特活)炭鉱(やま)の記憶推進事業団／[4](一財)北海道国際交流センター／[5](一財)白神山地財団／[6](一社)若狭高浜観光協会／[7](特活)中部リサイクル運動市民の会／[8](特活)プロジェクト保津川／[9](公財)水島地域環境再生財団(みずしま財団)／[10](特活)瀬戸内里海振興会／[11]うどんまるごと循環コンソーシアム／[12](特活)土佐の森・救援隊／[13](特活)グリーンシティ福岡／[14](一社)小浜温泉エネルギー